

報告

パブリックアートの取り組みの実践例について
—R4年度に制作した壁画などを中心に—

About the practical examples of Public Art

P11-16

黄 禧晶

Hei Jeong Hwang

造形芸術学科

1.はじめに

私の研究テーマの一つでもあるパブリックアート（公共美術）は一見難しそうで、日常との隔たりを感じがちである。しかしながら街中を歩いていくと至るところでその事例を見つけることが出来る。多数の一般の人の目に触れやすい場所に設置されているモニュメントや壁画など、気付かないうちに我々の身近なところにパブリックアートは存在する。

私はパブリックアートの実践について話題性を呼ぶ地域づくりの取り組みの観点からと同時に、アートセラピー（Art therapy）の観点からも注目すべきであると考えている。アートセラピーは一般的に言う芸術療法であるが、アート表現を通して、創る側も観る側も同時に得られる「癒し」がもたらす効果という身近な観点からアートセラピーについて考えてもらいたい。近年取り組んでいる壁画制作過程においてもそのセラピー的な効果を多く実感している。街を歩いていて、そこにいつもある親身な場所で目に触れるアートの世界、描いた人のタッチ一つ一つで伝わる共感や想いをより多くの人に感じて頂きたい。

2.パブリックアート実践例

2-1 糟屋郡須恵町との取り組み：九州道トンネル絵

私は糟屋郡須恵町と2018年から様々な連携プロジェクトを実行してきた。当初九州産業大学造形短期大学の授業である「学外アートプロジェクト」としてスタートした取り組みが徐々に定着してきて、更に新たなプロジェクトに繋げることが出来たのである。その一つとして九州道が貫通している須恵町の至る所にあるトンネルの美化事業が上げられる。町民の生活圏内にあるその多くのトンネルが実は薄暗く、雨水や鳥の排泄物などで汚れていることで、私のところに壁画の依頼が来たのがその始まりである。このプロジェクトは2019年旅石橋トンネルをスタートとし、2020年に道を挟んだ反対側で、2021年には草切橋トンネルで、2022年には新原校区のトンネルで実行された。それぞれの校区の地域住民の要望やその地域の特性、歴史、催しなどをテーマとしたデザインで制作してきた。

2022年の新原校区トンネル絵制作には私を含め、九州産業大学造形短期大学部在学学生4名、研究生1名、卒業生5名が制作に参加し、10月15日、16日の二日間にかけて制作した。須恵町役場の協力を得てガードマンによる二日間の交通規制もあり描きやすい環境づくりや近隣住民の協力も最大なものであった。新原校区の名所や歴史、毎年行われる地域の年末のライトアップなどの内容でのデザインであり、近隣にある須恵高等学校の生徒さんや通りかかる住民からは喜びの声が上がっていた。普段は忘れていたが自分たちが暮らす町の歴史、イベントが「絵」という形で見える、暗いトンネルを明るくする存在として生まれ変わることへの期待の声でもあった。

壁画制作はただ材料が揃って、描く内容が決まって、動員力があるだけでは決して実行出来ない。事前準備などにも依頼側や、場合によっては行政の協力も必要である。須恵町のトンネル周辺は水道や休憩場所もないため、須恵町

役場の職員に複数のポロタンクに水を入れて運んでもらう、汚水は処理してもらい、近隣の休憩場所の手配など様々な協力が得られたからこそ、4年間のこのプロジェクトが続いてきたのは言うまでもない。このトンネル絵プロジェクトは2023年にも継続する予定である。



(図1) 新原校区トンネル絵作業風景



(図2) 新原校区トンネル絵作業風景



(図3) 新原校区トンネル絵完成

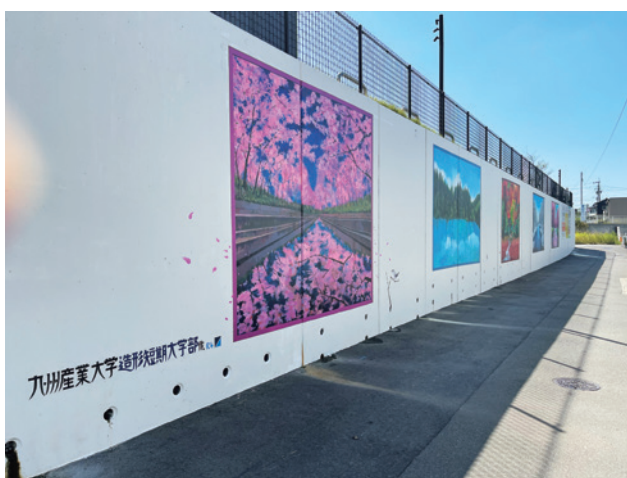


(図4) 新原校区トンネル絵完成

2-2 メディカルコミュニティモール須恵壁画プロジェクト

本プロジェクトは有限会社八幡総合企画からの依頼で、糟屋郡須恵町旅石に位置するメディカルコミュニティモール須恵の敷地内の約50mの擁壁に制作した壁画プロジェクトである。本プロジェクトは所有者である柳瀬雅彦さんから、須恵町の医療モールとして地域住民に明るい景観、風景を提供することで須恵町に貢献したいとの思いからスタートした。長く地域住民を楽しませたいことで日本の巡り巡る美しい四季をテーマとしたデザインにして欲しいとの依頼があり、擁壁の面積や作りを考慮して春夏秋冬の季節が2回変わるデザインに決まった。使う画材や事前下塗り、仕上げ用のクリアなどについての打ち合わせを数回行い、本制作に取り掛かった。しかし、個人の思いからスタートしたこのプロジェクトは町に関わる様々な方々の協力のもとで事前準備や事後の仕上げがボランティアで行われたことは実に驚きである。地域の足場屋がボランティアで足場を提供し、下地塗りには役場や地域のおやじ会の皆さん、地域の子供達がボランティアで参加した。コンクリートの打ちっぱなしの壁面の穴を埋めてもらい、丁寧に白塗りをしてもらったことで制作に多大な助けとなった。

本プロジェクトには私を含め、九州産業大学造形短期大学部1年生1名・2年生3名・卒業生（本学研究生1名／4年大編入生3名／社会人5名）の参加があった。制作日程として8月31日から9月9日の間の四日間を予定してい



(図1) メディカルコミュニティモール須恵トライアル側完成図



(図2) メディカルコミュニティモール須恵道路側完成図



(図3) メディカルコミュニティモール須恵部分完成図



(図4) メディカルコミュニティモール須恵全体完成図

たが、大型台風が直撃し、その後の雨などで予定通りの制作が困難となっていた。悪天候の後の炎天下が続く天候も制作の妨げになっていた。多くの壁画プロジェクトを遂行してきたものの、今回は特に難しさを感じた。しかし、通りかかる住民や隣の大型スーパーを訪れた買い物客からの声援もあり、無事に壁画が完成出来た。当初の工程から少し日程が延びた9月13日に制作は完結し、その後おやじ会の協力で仕上げの保護剤を塗ってもらい、足場を撤去して壁画は完全に姿を現した。そこで町の新たな名所として生まれ変わったのである。

2-3 移動販売車コバコバル車体イラスト制作プロジェクト

本プロジェクトは自家製レモネードなどを提供する洋風居酒屋・コバコバル様の依頼でレモネード移動販売車の車体の側面と背面にレモネードやレモンを素材としたイラストを制作したものである。コロナ禍で影響を受けたコバコバルから、若い女性をメインターゲットとしたレモネードの販売をデザイン面で支援することでこのプロジェクトはスタートした。レモンやレモネードを題材にしてインスタ映えできる爽やかで明るいイメージのデザインにすることが依頼側の要望であったため、複数回にかけての打ち合わせやデザイン案の修正が行われた。その結果果汁あふれるレモネードのみずみずしさを強調するとともに、レモン汁が飛び散るような迫力を表現しようとトリックアート風に

仕上がった。依頼した企業の要望にできる限り近いものに仕上げることの難しさを改めて実感したプロジェクトであったものの、制作場所を大学内にしたことによってそのプロセスを、正にターゲットとなる若い世代に見てもらうことで現場での反応も制作の参考にすることが出来た。

本プロジェクトは2022年4月22日、23日の二日間にかけて本学2年生4名・本学卒業生3名（研究生1名／九州産業大学3年生2名）の協力を得て制作した。完成したレモンカーは福岡の様々な集客施設で披露され、街の至る所を走行している。



(図1) 移動販売車完成図側面



(図2) 移動販売車完成図背面



(図3) 移動販売車制作過程



(図4) 移動販売車集合写真

2-4 ユナイテッドハーバー壁画プロジェクト

本プロジェクトは株式会社クォーターズ様から、北九州八幡東区に所在するウェディングイベント施設ユナイテッドハーバーをリニューアルオープンするにあたり、敷地内の壁面数カ所にリゾート地を連想させるイメージの壁画の依頼で実行に移ったのである。施設は旧スペースワールドと近接し、海に面しており、依頼側からの、特にアメリカのサンフランシスコをイメージさせるポップでインスタ映える名所にしたいとの要望でデザイン案制作に取り組んだ。実際に制作したのは高さ3.5m、横幅15mの壁面、高さ5m、横幅8mの壁面、レストラン施設の壁面2カ所、プレハーブの倉庫1カ所で合計5カ所の壁面であった。本学に依頼が来たのがリニューアルオープンの日程を3ヶ月も残してない時期であり、実際の制作は8月の夏休みの期間にせざるを得なくなったため、時期的にも日程的にもハードなスケジュールとなった。数回の打ち合わせを経てデザインが決まり、事前準備も終わって制作日を数日控えていた時、依頼主の事情で足場や下地塗りの作業が間に合わないことが判明し、下地作業なし、足場なしでのスタートに踏み切った。後からレンタルの足場を用意してもらったものの、今回も予定より制作が数日伸び、下地作業が出来ていないまま塗ったことで絵の具の吸収が激しく、準備していた絵の



(図1) ユナイテッドハーバー駐車場側全体図



(図2) ユナイテッドハーバー駐車場側制作過程



(図3) ユナイテッドハーバー駐車場側部分



(図4) ユナイテッドハーバーレストラン側完成図

具が足りなくなるなど様々な困難が生じてしまった。炎天下の中、今回は野外壁画制作が初めての1年生の参加も多く、慣れない環境での制作で悪戦苦闘していた。しかし、私の取り組みに長年協力してもらっている卒業生達のサポートが多大な力を発揮し、当初予定していた四日間の日程を一日伸ばして無事に完成に至った。

本プロジェクトは8月18日から8月24日の間の五日間、本学1年生11名、2年生1名、本学卒業生4名の協力で行

われた。いろんなアクシデントがあったものの、人間の力で人間の温もりで優れた結果が得られた貴重な経験となったのである。

2-5 NPO 法人ちくご出会いサポートセンタージュノール 壁面アートプロジェクト

本プロジェクト中村産業学園と包括連携協定締結をしている筑邦銀行様からの依頼で計画、実行したものである。2019年に設立したNPO法人ちくご出会いサポートセンタージュノールは元々久留米駅前にあったが、2021年に久留米市日吉町筑邦銀行2階に移転してきた。同センターは地域企業から寄せられた協賛金で運営しているため、現在のセンターの環境整備にかかる予算が限られており、独身男女の出会いをサポートする場としては殺風景のまま運営していたのが現実であった。そこで本学に協力の依頼がありプロジェクトの実行に至ったのがその経緯である。打ち合わせで現地を訪ねた際にセンター内は移転とともにクロス張りの張り替えなどはしていたが、明るいイメージはなく、センターが位置する2階の廊下も劣化しており、薄暗いままが現状であった。そこでセンター内の待合室や入り口の壁、面談室の3カ所、更に2階廊下の全面の塗り替えを構想し、デザインに取り掛かった。男女の出会いや、信頼、愛をイメージする花言葉の「花」、2人が共に歩くことを願う「道」、センターのポスターからイメージを借りての「若いカップル」の絵をセンター内の3カ所に制作した。廊下は全面明るい色で塗り替えて学生の協力を得て「緑」をイメージしたデザインを考案してもらって廊下の全面に壁画を制作した。

制作は8月26日、29日の二日間にかけて行い、本学1年生3名、2年生3名、研究生1名、本学卒業生2名の協力を得て完成させた。二日間制作に苦がないようにセンターの方や筑邦銀行の皆さんに様々な配慮をしてもらい、更にメディアの取材まで受けて予定通り完成に至られたのである。特に今回は室内の制作であったため、天候に左右されることはなかったので快適な環境で制作に臨むことが出来た。この取り組みで新たな出会いへの細やかな応援が出来たのは参加した学生を含め、私の誇りとなった。



(図1) ジュノール壁画集合写真



(図2) ジュノール見合室壁画全体



(図3) ジュノール待合室壁画制作風景



(図4) ジュノール廊下壁画完成図

3.まとめ

R4年度に行われた研究の中で2-2「メディカルコミュニティモール須恵壁画プロジェクト」、2-3「移動販売車コバコバル車体イラスト制作プロジェクト」は11月3日、4日に開催されたKSU VISION DAY文×理×芸=展で事例発表として紹介された。それは会場を訪れた自治体や企業さんに観てもらえる機会となり、R5年度に新たにプロジェクトの依頼まで繋げることが出来た。パブリックアートへの関心を更に広げることが出来たきっかけとなったのである。

上記に述べた実践例以外にもR4年度に行われた他プロジェクトもあるが、2015年から小さな取り組みからスタートした壁画アートが、限られた人に留まらず、多くの人々を結ぶ大きな力になっているのではと、毎回のプロジェクトを実行し終える度に感じている。制作に参加する学生も2年間の短い時間で卒業してしまうが、卒業してからもその経験を活かして社会に貢献したい気持ちで私の呼びかけに積極的に応じている。縦のつながりが出来、コミュニケーションの場にもなっている、更に地域の声援や関心でまた次へと新たなアートへの滋養になる本研究は需要がある限り、全力を注いで取り組もうと考える次第である。



(図1) KSU VISION DAY文×理×芸=展の様子